

三經義疏の体系的成立について

橋 本 芳 契

一 師蛮の太子伝

近世初頭を代表する本邦における聖徳太子観は、『本朝高僧伝』巻六九所収の太子伝であるといえよう。正元師蛮（一六二六—一七一〇）号独師は小田原（相模国）の人で臨済家に属し、元禄十五年（一七〇二）三月、洛の東西軒において七五巻という浩瀚な日本僧伝を成し本朝高僧伝と命名したのである。所載総じて一六八四名。これを正伝一四三〇、附見二五四に内訳するが、門別は法本以下の十門で、その第十門願雑の、しかもこれをさらに五科に細分するうちの第一科応化中の筆頭に太子伝を掲げたのである。まづいわく、

原^{スル}夫^レ、諸^ノ仏^ノ菩薩^ハ、依^リ因^ニ地^ニ化^シ他^ノ之^ノ願^ニ、出^テ世^ニ度^ス生^ス。故^ニ学^ブ其^ノ教^ヲ者^ハ、乘^リ三^ノ願^ニ力^ニ而^シ躋^リ覺^ニ路^ニ。即^チ前^ノ九^ノ科^ニ進^ム修^シ之^道、而^シ各^ニ專^ス一^ノ事^ヲ。兼^テ又^ハ広^ク修^シ、傍^ニ行^フ多^ク方^ヲ不^レ窮^ク、触^レ類^ニ而^シ長^シレ^ル之^ヲ。所^レ以^テ有^リ斯^ノ科^一（註、願^ニ雜^ニ）。唐^ノ宋^ノ僧^ノ傳^ハ、尾^ニ立^テ雜^ニ利^ニ。而^シ只^シ有^リ二^ノ声^ノ德^ノ一^ノ篇^ヲ、雜^ニ之^ノ義^ヲ不^レ満^ク矣^ト。釈^ノ書^ノ願^ニ雜^ニ之^中、分^テ古^ノ德^ノ王^ノ臣^ノ等^五小^ノ科^ヲ、義^ヲ爲^シ備^ヘ焉^ト。

三經義疏の体系的成立について（橋 本）

聖徳太子、乘^リ救^フ世^ノ之^ノ願^ニ輪^ニ、受^テ生^シ日^ノ域^ニ、撫^シ育^シ百^ノ姓^ヲ、漸^ニ郷^ニニ^シ真^ニ教^ヲ。本^ノ朝^ノ仏^ノ法^ノ之^ノ興^リ、展^ビ自^レ太子^ニ而^シ始^メ。雖^シ不^レ全^ク梵^ノ儀^ヲ、而^シ其^ノ南^ノ嶽^ノ之^ノ応^ニ化^シ也^ト。且^シ菩薩^ノ之^ノ大^ノ願^ニ、何^レ画^シ僧^ノ化^シ耶^ト。況^シ此^ノ書^ハ、摩^訶衍^ノ之^ノ部^{ナリ}也^ト。唯^ニ貴^ニ太子^ノ、載^シ之^ノ篇^首云^フ。（傍^ノ圈^ノ点^ノ、筆^ノ者^ノ）と。師蛮は太子伝を稿するにつき『上宮聖徳法王帝説』等の一八書を参照した。

本文内容について要項を抄出して見よう。

- 1 太子諱聖徳、用明帝第一子。
- 2 六年（敏達）百濟國貢^ニ經^ヲ論^一、太子奏曰、昔在陳國、略見^ニ斯^ノ文^ヲ、諸^ノ惡^ノ莫^ク作^シ諸^ノ善^ノ奉行^ス。思^フ其^ノ垂^テ範^ニ、今^ニ欲^シ見^シ之^ヲ。
- 3 又召^シ博士^ヲ覺^シ筈^一、外^ニ学^ニ理^ヲ通^ス。
- 4 三年（推古）夏五、高麗^ノ慧^ノ慈^ノ、百^ノ濟^ノ慧^ノ聰^ノ來^リ、深^ク遠^ク内^ニ教^ヲ。太子師^レ之^ヲ、聞^ク一^ノ知^レ十^ヲ。二^ノ僧^ノ相^ニ嘆^シ、謂^フ爲^シ真^ニ人^一也^ト。
- 5 五年夏四月、百濟王子、阿佐來朝。
- 6 十二年四月、鑿^シ製^シ憲^ニ章^ヲ十七^ノ條^一。
- 7 十四年秋七月、帝詔^シ太子^ニ、講^シ勝^ニ鬘^ノ經^ヲ。命^シ諸^ノ大^ノ德^ヲ、質^シ問^シ經^ヲ。

義。

8 冬十月、講法華於岡基宮。王臣信聞、七日而竟。賜播州莊田一千畝、即納法隆寺。

9 十五年秋七月、命小野妹子、先世所持法華、在衡山般若台、当往取來。

10 班鳩宮有夢殿。一月三度沐浴而入。製勝鬘法華、維摩等經疏。有滯礙、則必有金人、來自東方、論以深義。是秋九月、又入夢殿、閉戸七日。慧慈曰、太子入三昧。及出、定、經在三玉几上、以闕字、示慈曰、是我所持、前取來者、弟子經也。

11 是冬（二十七年）十月、特賜詔問、奏答興隆三宝、慈憐四民、因述意願、進語四條、（不詳）

12 二十九年二月五日、太子謂妃曰、流傳佛法、吾事畢矣。今夜当行、即同沐浴。……二人長往。寿算四十九。

13 慧慈在高麗、聞計、慟哭曰、太子捨我、我何独存。來歲二月、同日逝矣。至期果然。

以上のあと太子に六名のあったこと、所造の大伽藍のこと等をのべる。そして結びに代えて贅していう。

抱慧思之再身、調熟此土時機之生酸、而從襁褓之中、克赫厥靈。一戎衣、翦滅凶頑、儲武、撰政。聖謨、洋洋、布三世之憲章。講讚、於真乘、令各、知所、歸向、焉。於燦、聖德、吾國興法、之洪基也。（傍点、筆者）

と。太子こそその聖徳の令名にそむかず、わが国に仏教あらしめた大恩人であるというのである。余白を借りて師蛮は、そのあと、「近年儒者流にして仏法を排斥し、太子から伝教弘法諸師までを譏りぬく者がある、何とて貴僧は平然としてゐるか」と問う者に答えた言葉として、仏教はそういうものでないとなしなめた所、早々にその人が退散したと付記して、それも太子の余徳としている。史書を繰ると、その頃富永仲基（一七一—一四六）は『出定後記』二卷（延享元年、一七四四作）を出し、大乘非仏説を唱えている。

本稿は師蛮の所説中に「勝鬘法華維摩等經疏」（前掲第七項）と出ていた世にいわゆる上宮御製疏——現在それを限定的に三経義疏という——について、戦後のわが国学界の一部に疑いをもたれているに對し、太子の疏が实地にどのような流行のしかたをしていたものであるかを、奈良時代の三論宗の学僧智光の『浄名玄論略述』（以下、『略述』と略記）についてさぐり、多少の弁明を試みようとするものである。

二 智光と上宮疏

浄土曼荼羅で有名な三論の智光は、奈良の元興寺において智藏に就いた人、兄弟子に道慈（七四四寂）があり、同門の札光とは特に仲がよかった。智藏（年寿不詳）は中国へ渡り吉藏に就いた人であるから、智光はその孫弟子ということに

なる。本邦では智蔵より先に慧灌（惠観）が同じく渡唐して吉蔵に学んで帰っていてこれを三論の第一伝とする。智蔵のは第二伝である。なお宗旨名では三論が日本で最初である。すでに吉蔵は維摩経を深く学んで『浄名玄論』八卷（大正蔵三八）を著していた人なので、智蔵を介し、それが大きく智光に影響したものと思われる。さらに考えるべきは、維摩経に伏在する浄土主義の開発である。

元興寺智光（年寿不詳）については、『本朝高僧伝』第四等による、河内国安宿郡の人、俗姓鋤田連、のち上村主と改め、母は飛鳥部造。稟性純真、九歳に出家。さきのように智蔵から三論を受けたが、またあまねく経論を涉獵したといわれ、そうした中に元興寺に伝わった上宮疏もあつたのである。現存するのは『般若心経述義記』一卷と、これから見ようとする『略述』四巻中の初め三巻とだけの著述であるが、他にも数篇あつたようである。

『略述』はその初めに長文の「序」を置いている。その冒頭にまず浄名玄論（吉蔵）をほめ、

観夫、渾元創分、清濁自域、三才体残、万有景列。……今此論者、斯乃如来調御之洪範、大士利物之格言、含三衆趣之大虚、統三群教之巨海。所以駢一乘於不二、啓三妙藏於玄門。体用因果無不三周備。（中略）然即言芸旨遠、小学多功、良為護法化物之模軌者、其唯浄名玄論哉。

三経義疏の体系的成立について（橋本）

という。

本文に入つては、まず五門の分別（叙教起所由、仏教所在、釈論題目、明造論主、随文解釈）を示し、第五の随文解釈中に、初に「造論の意を彰わす」と後に「論本を釈する」との二を分つ。その釈論本を更に初後とするうち、初は総標論体（以上巻一の本）であり、後は随標解釈である。

次に随標解釈をさらに三段とし、第一は釈名題、第二は論宗旨、第三は論会処である。そして第一の釈名題を次の三とする。

〔釈名題〕

初総名……………（総序名、積立名本門、同余）巻一末、巻二の

本末

二衆経同異……………（総論）

三別論此経……………（別叙）

卷三の本

第二（宗旨）、第三（会処）の両論がそれに続き、権実の二智（方便と真実）を説くことが維摩経の本旨であるとされ、（以上、第三の末）最後に会処（菴羅の仏辺と維摩の方丈）が説かれたが、その部分である第四巻の欠けたことは残念である。ことに論会処の最後には改めて「浄土」が明かされていたのである。

以上のごとき一論の構成理解をもとにして『略述』中の諸所に援引された上宮御製疏——『略述』には単に上宮疏とも

いう——を検すると、大凡次の九箇所の所出と知れる。

(一) 每省慰諭之言、遊心調伏之旨。(浄名玄論)

上宮、御製維摩疏云、「然慰諭是外化行、調御是自行」

(二) 叙其論意略為三別。第一名題、第二宗旨、第三叙会(浄名玄論)

上宮此經疏(總序)云、「維摩詰是西國之音、秦言浄名。和光同塵、不為衆累所染。故称浄名。妙唱其人、故言三所說」

經、訓法訓常。(所引、中略して)一名不可思議解脱者、解脱是八地以上權実二智。此二智、本迹雖殊、並非二乘所議。故云三不思議。然諸經明權実二智不同。今此經若並照二諦理、為実、變現施為為權。此二智並絶二拘累、故称解脱。此經有三名。上言維摩詰、以人名為目、下言不思議解脱、以法為題。重上人名故、於法謂之一也。

(三) 夫法身无像(浄名玄論)

上宮勝鬘疏云、「如來色无尽者、无尽謂是常住、嘆真身、无色常住。何則既為三色法、理无不尽。既云不尽、即非色。常住。自明。」(故云如來色無尽)亦可、以智為色、亦可是応色之本、故云色。」由是等文、故知三仏果都无有レ色。

(四) 而玄籍弥布(浄名玄論)

乃至上宮法華疏云、「從復次以下第二明不親近実法有。但解実法即空、不存三諸境。故即是止善」

(五) 無言、而無不レ言(浄名玄論)

上宮、解曰、「諸法寂滅相、不可レ以三言說者、是謂無相理」

(六) 八明三四句絶。

上宮此經疏云、「身子答解脱無相、不可レ說、故照然也。身子但知解脱無言、未能三齊一。所以今呵者、理中為レ論。言即不言、不言即言。諸法皆然。故云、言說文字、皆解脱相」

(七) 次明外動不思議(下略)(浄名玄論)

上宮此經疏云、「包山吞海、吸風服火、變声政質、促長演短、皆不思議之迹。然、積不思議有三家。一云、須弥芥子、同是虚假、故得二相容。二云、須弥非実入二芥子中、但聖人神力令レ見感者也。三云、実入、不知、亦不知、不知、不知其所、以然、猶然、故名不思議也」

(八) 三者得失門(浄名玄論)

上宮法華疏云、「深着諸邪見、以苦欲捨、苦者明、見濁、即其証也」

(九) 問若上来所說皆是縛者、名何為解脱耶(下略)(浄名玄論)

上宮此經疏中「或云、无住者、謂空理之諸法皆以空理為本也」

(三) 今所釈者、華嚴七処八会、斯經二処四集、言二処者、一菴園

処、二方丈処(下略)(浄名玄論)

上宮此經疏云、「菴羅是菓名、而此无翻。摩法師亦云、似桃而非桃、但先言捺氏。此事在二他經、而此經說在二方丈、而言在二菴羅者、舉其付属之処也」

智光の『略述』における上宮疏(三經義疏)からの引用は、

右のように維摩經義疏からのを主として、他の二疏にも及んでいたことを知るとき、われわれには少なくとも元興寺に伝わった太子疏は三疏一体のものであったことが分るのである。

三 三經義疏の一体性

さきの師蚕『太子伝』中には、「勝鬘・法華・維摩等の疏を製す」と読まれる一節があった。その「等」の一字は何を意味するか。おそらく聖徳太子の仏教研究の幅や広がりを示す言葉と解してよいであろう。また勝・法・維の三經の順に掲げる中には、これまた『伝』中に見えるごとく、推古天皇への進講がまず勝鬘であり、次で法華であった次第に従ったものともいえよう。同時にこれら兩經に対すると相違して第三の維摩一經に対してのみは進講の所伝のないことが、上宮疏中の維摩疏を疑う一理由とされることもあるが、それは進講の一事を必須に見たり、また更にはこれら三終の思想内容上の特異性を理解しないによるもので、すでに智光の『略述』における維摩原經の浄土義に対する深篤な憶念を想察したことによっても明らかになったごとく、太子における維摩經も亦、恐らく勝鬘の因地に立つ念仏の誓願一乘に比し、法華の太子のいわゆる一大乗道が仏乘の当体として中道実相の義を具するものとして、さらにそれらの発展的様相の具体的

顯示として維摩の如き果上救世の菩薩行界の具備と顕現を必須としたものではないか。新研究として、日本の仏教が真に日本仏教となり得たのは鎌倉仏教がはじめてで、聖徳太子のそれは、単にその始まりを為したものに過ぎないという学者の見解もあるが、それは教理思想もしくは一般に歴史の立場から言うことで、哲学、とくに宗教哲学の立場からすれば、

さきの師蚕の太子観におけるように、太子の根本仏教から日本仏教はいささかのズレも見せていない実際においてあるのである。まさに鎌倉仏教を一方において代表する親鸞自身も、「聖徳太子のおあはれみに、護持養育したまひて、如来二種の廻向に、すすめいれしめおはします」（聖徳皇和讃）と讃し、往還二廻向の趣意に信知した浄土真宗の大道ももつとく所は和国の教主聖徳皇であったとなしている。あるいは勝鬘によって往相を、また維摩によって還相を、そして法華自体によって回向論そのものを明確にし得る所があったものかも知れない。三經義疏は宗教の道を為政者として現実苦惱界の真只中にありながら、平静に実証した聖徳太子の歩みの跡として、これを形式的にも内容的にも如実な一体的展開性の上にその意義を伺うべきものと考ええる。その成立の意義はこの国の仏教の運命と共に久しいものであろう。

1 大日仏全一〇二。三八〇—三八三頁。

三經義疏の体系的成立について（橋本）

六〇

2 法本・淨慧・淨禪・感進・淨律・檀興・淨忍・遠遊・誦誦のこと。五科は応化・藥邦・先徳・神仙・感怪。師蛸はこれより

先、すでに『延宝伝燈録』四一卷（延宝六〇一六七八年）の禪匠伝を出しており、いま併せて教禪二門の僧伝が成った。また『本朝高僧伝』にはそのあと道契（一八一六—一七六）の『続本朝高僧伝』がある。

3 (1)上宮皇太子菩薩伝、(2)聖徳太子伝略、(3)上宮聖法法王帝

説、(4)上宮聖徳太子伝補闕記、(5)法隆寺古今目録、(6)大安寺縁起、(7)日本書紀第二十二、(8)神皇正統記、(9)本朝皇胤紹運録、(10)皇代年記、(11)皇年代略記、(12)元亨釈書第二十、(13)扶桑略記第四、(14)一代要記、(15)続日本紀第十八、(16)本朝法華驗記卷上、(17)古今著聞集第二、(18)今昔物語第十一。

4 生於厩辺、故曰厩戸、用明帝愛敬、居宮南上殿、故曰上宮、八人奏事、一時聞別、故曰八耳、聰明仁恕、故曰聖徳、豊聡耳、聡者八耳之同称也。

5 天王寺、法隆寺、元興寺、中宮寺、橘寺、葛城寺、日向寺。

6 福井康順「三經義疏の成立についての疑義」（一九六六『倉田昭博士古稀記念。印度学仏教学論集』四五七—四八〇頁）参照。

7 礼光（頼光）が晩年、人と語らずして寂した。智光はその死後往生の世界の極楽なるを夢見し、夢さめて所見のままを描かせたのが「智光曼荼羅」（智光法師西方万陀羅）であると伝説する。その経過の「天寿国曼荼羅」の成るに似ているのに驚く。天寿国曼荼羅については青木茂作『天寿国曼荼羅の研究』（昭二一、鶴故郷舎）があり、同曼荼羅の維摩経を背景として

成立したものであることを論証している。

8 大般若経疏二〇卷、法華玄論略述五卷、中論疏記三卷、往生論釈五卷、孟蘭盆経疏一卷、および安養賦は今ない。

9 日大蔵、第二五卷（方等部章）二一頁上。所引維摩疏（島田著根本）巻下一八右問疾品。

10 日大蔵、同二六頁下。維摩疏巻上一左総序。

11 日大蔵、同三四頁上。維摩疏巻下六〇左觀衆生品。

12 日大蔵、同三八頁上。法華疏安樂行品。

13 日大蔵、同三九頁下。上宮疏に類句法華疏にも維摩疏にも出る。

14 日大蔵、同〇九頁下。維摩疏巻下觀衆生品。

15 日大蔵、同二八三頁下。維摩疏下四七右—左、不思議品。

16 日大蔵、同二二二頁下。法華疏。

17 日大蔵、同二一三頁下。維摩疏下六六左、觀衆生品。

18 日大蔵、同二八八頁下。維摩疏上四右、総序。

19 柴田実「日本仏教の成立」（昭五五『図説日本仏教史』第二巻二六—三五頁）参照。

（北陸学院短期大学講師）